

松江の大凧 ——武者凧(みしゃだこ) ——

大正年間ごろまで松江の空に浮かんでいた大凧、武者凧(みしゃだこ)は、旧暦2月初午はつうまごろ(現在の3月)から揚げ始めました。このころから風向きが東風や南西の風になり、天気も晴れ続きになります。

現在の凧揚げは子どもたちの正月遊びというイメージがありますが、ここ松江では春の遊びで、大きな商家の主人らが従業員を繰り出して凧を揚げさせ、自らは毛氈もうせんの上で花見をしつつ楽しむものでした。

武者凧は明治20年から同40年代が全盛期で、末次本町すえつづほんまちの商家の屋根の上や汽船等から数十の凧が揚がっていたのです。しかし、昭和時代以降、電線や高圧線が町中に架設されるようになり、大型の武者凧から姿を消していき、現在では全く見られなくなってしまいました。

松江市民の記憶からなくなった武者凧を展示し、その大きさを見てもらうとともに、過去のものとなった松江の凧揚げについて振り返る機会とします。



武者凧(みしゃだこ)

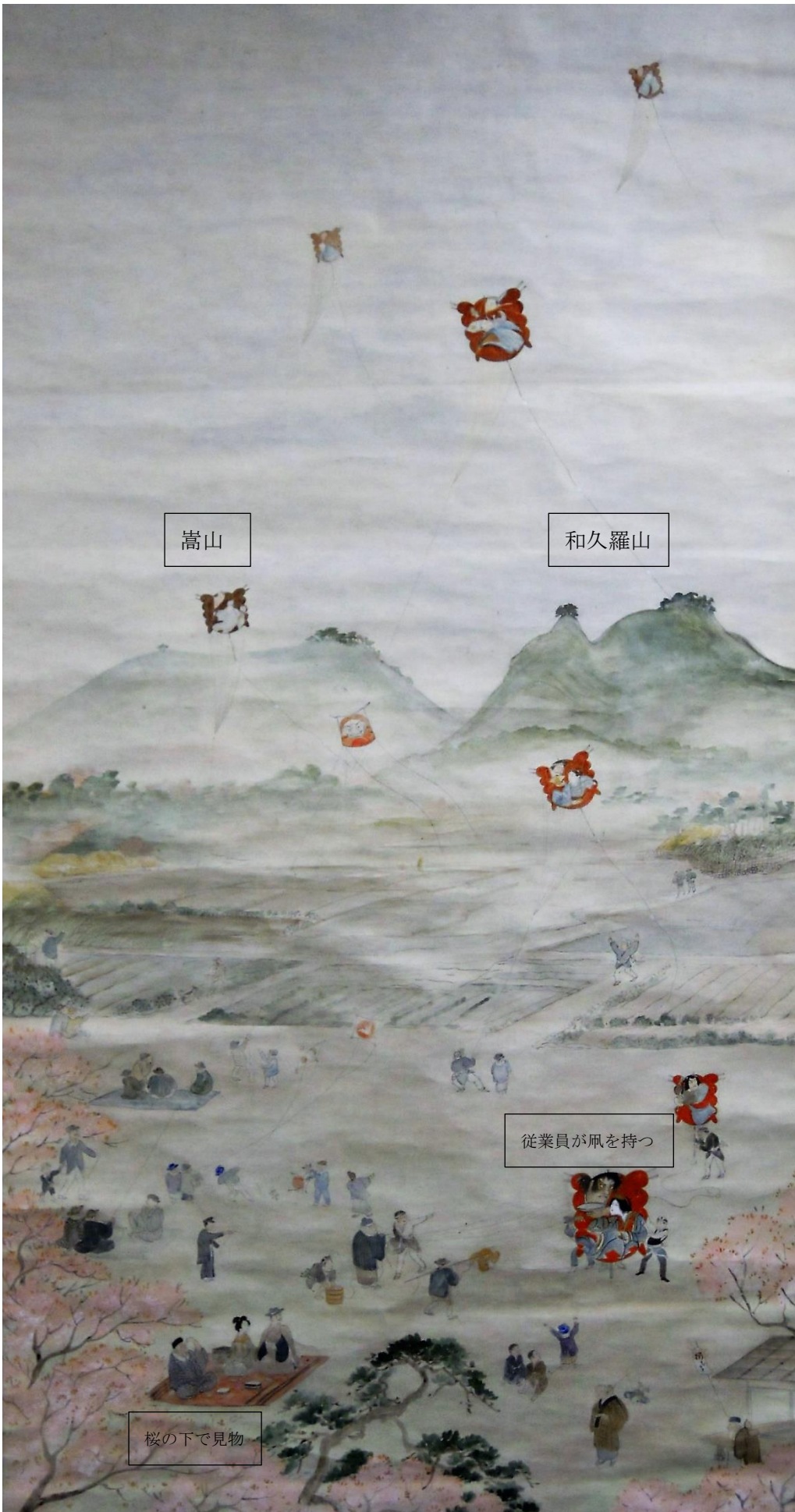
骨を縦横ともに5本ずつ、縦が170cm、横が140cmもある大凧だが、これでも小さい方だったという。図柄は牛若丸と弁慶などの武者絵や金太郎といった勇ましいものが好まれた。



糸巻き

末次本町の商家「黒田屋」が所持していた武者凧の糸巻き。糸は荒苧を繕って作り、長いものでは250mのものもあった。

凧揚げの図



松江市内の山である和久羅山と高山を背景にして、桜が咲きほこる季節に子どもや大人が凧揚げに興じる様子を描く。

100年ほど前、松江の空にはたくさんの大凧が揚がっていた。